

I am a Cat – Chapter 9a (Natsume Sōseki)

きゅう
九

しゅじん あばたづら ぐいっしんまえ だいぶほや にちえいどうめい こんにち
主人は痘痕面である。御維新前はあばたも大分流行ったものだそうだが日英同盟の今日から
み かお じこうおく かん すいたい じんこう ぞうしょく ほんびれい
見ると、こんな顔はいささか時候後れの感がある。あばたの衰退は人口の増殖と反比例し
ちか しょうらい まった あと た いた いがくじょう とうけい せいみつ わ だ
て近き将来には全くその迹を絶つに至るだろうとは医学上の統計から精密に割り出され
けつろん わがはい ねこ ごう うたがい さしはさ よち めいろん
たる結論であって、吾輩のごとき猫といえども毫も疑を挟む余地のないほどの名論で
げんこんちきゅうじょう つら ゆう せいそく にんげん なんにん し
ある。現今地球上にあばたっ面を有して生息している人間は何人くらいあるか知らんが、
こうさい くいきない ださん いっぴき ひとり
吾輩が交際の区域内において打算して見ると、猫には一匹もない。人間にはたった一人あ
る。しかしてその一人が すなわ ち主人である。はなはだ気の毒である。

たび かんが なん いんが みょう おくめん にじっせいき
吾輩は主人の顔を見る度に考へる。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面なく二十世紀
くうき こきゅう むかし すこ はば き に
の空気を呼吸しているのだろう。昔なら少しは幅も利いたか知らんが、あらゆるあばたが二
うで た の めい さつこん いぜん はな あたま ほう うえ じんどう がん うご
の腕へ立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取って頑として動か
じまん たいめん かん わけ でき こと いま と
ないのは自慢にならんのみか、かえってあばたの体面に関する訳だ。出来る事なら今のうち取
はら じしん こころぼそ ちが どうせいふしん
り払ったらよさそうなものだ。あばた自身だって心細いに違いない。それとも党勢不振の
さい ちか らくじつ ちゅうてん ばんかい い いきご おうふう いちめん
際、誓って落日を中天に挽回せずばやまずと云う意気込みで、あんなに横風に顔一面を
せんりょう けつ けいべつ い み
占領しているのか知らん。そうするとこのあばたは決して軽蔑の意をもって視るべきもので
とうとう りゅうぞく こう ばんこふま あな しゅうごうたい おおい ごじん そんけい あたい
ない。滔々たる流俗に抗する万古不磨の穴の集合体であって、大に吾人の尊敬に値す
でこぼこ よろ けてん
る凸凹と云って宜しい。ただきたならしいのが欠点である。

こども うしごめ やまぶしちょう あさだそうはく かんぼう めい い ろうじん
主人の小供のときに牛込の山伏町に浅田宗伯と云う漢法の名医があつたが、この老人が
びょうか みま かなら の まい そうはくろう
病家を見舞うときには必ずかごに乗ってそろりそろりと参られたそうだ。ところが宗伯老が
な ようし だい じんりきしゃ へん
亡くなられてその養子の代になったら、かごがたちまち人力車に変じた。だから養子が死
あと つ かつこんとう ば
でそのまた養子が跡を続いたら葛根湯がアンチピリンに化けるかも知れない。かごに乗って
とうきょうしちゅう ね どうじ み な
東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですらあまり見つともいいものでは無かつた。こん
まね すま きゅうへい もうじゃ きしゃ つ こ ぶた
な真似をして澄していたものは旧弊な亡者と、汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであ
つた。

しゅじん 主人のあばたもそのふる こと 振わざる事においては そうはくろう 宗伯老のかごと 一般で、はたから みる き 毒なくらいだが、かんぼうい 漢法医にも おと 劣らざる がんこ 頑固な主人は いぜん 依然として こじょうらくじつ 孤城落日の あばたを てんか 天下に ばくろ 曝露しつつ まいにちとうこう 毎日登校して おし リードルを 教えている。

かくのごとき ぜんせいき 前世紀の 記念を きねん 満面に まんめん 刻して かく 教壇に た 立つ彼は、その せいと 生徒に たい 対して じゅぎょういがい 授業以外に だい 大なる くんかい 訓戒を 垂れつつ あるに 相違ない。彼は 「猿が 手を 持つ」 を はんぷく 反覆するよりも 「あばたの 顔面に 及ぼす 影響」と 云う 大問題を 造作もなく 解釈して、 不言の間に その とうあん 答案を 生徒に 与えつつある。もし 主人の ような 人間が 教師として 存在しなくなった 暁 には 彼等 生徒は この 問題を けんきゅう 研究するために 図書館 もしくは 博物館 へ 駆けつけて、 吾人が ミイラ によって エジプト 人 を 髣髴すると 同程度の 労力を 費やさねばならぬ。この 点から 見ると 主人の あばた 痘痕も 冥々の うち 妙な 功德を 施こしている。

もっとも 主人はこの 功德を 施こすために 顔一面に 疱瘡を 種え付けたのではない。これでも 実 は 種え 疱瘡をしたのである。不幸にして 腕に 種えたと 思ったのが、いつの間にか 顔へ 伝染していたのである。その 頃は 小供の 事で 今のように 色気も なにも なかつたものだから、 痒い 痒いと 云いながら 無暗に 顔中 引き搔いたのだ そうだ。ちょうど 噴火山が 破裂して ラヴァが 顔の上を 流れた ようなもので、 おやが 生んでくれた 顔を 台なしにしてしまった。主人は 折々 細君に向って 疱瘡を せぬ うちには 玉のような 男子であったと 云っている。浅草の 観音様で 西洋人が 振り反って 見た くらい 奇麗 だったなどと 自慢する 事さえある。なるほど そうかも 知れない。ただ 誰も 保証人の いないのが 残念 である。

いくら 功德になっても 訓戒になっても、きたない 者は やっぱり きたないものだから、物心が ついて 以来と 云うもの 主人は 大に あばたについて 心配し出して、あらゆる 手段を 尽して この 醜態を 揉み潰そうとした。ところが 宗伯老のかごと 違って、いやになったからと 云うて そう 急に 打ちやられるものではない。今だに 歴然と 残っている。この 歴然が 多少 気にかかると 見えて、主人は 往來を あるく 度毎に あばた面を 勘定して あるく そうだ。今日 何人 あばたに 出逢って、その 主は 男か 女か、その 場所は 小川町の 勸工場であるか、上野の 公園であるか、ことごとく 彼の 日記につけ込んである。彼は あばたに関する 智識においては 決して 誰にも 譲るまいと 確信している。せんだって ある 洋行 帰りの 友人が 来た 折なぞは、「君 西洋人には あばたがあるかな」と 聞いた くらいだ。すると その 友人が 「そうだな」と 首を 曲げながらよ

ほど考^{かんが}えたあとで「まあ滅^{めった}多^たにないね」と云^いったら、主人^{しゅじん}は「滅^め多^たになくっても、少^{すこ}しはあ
るか^い」と念^{ねん}を入れて聞^きき返^かえした。友人^{ゆうじん}は氣^きのない顔^{かお}で「あつても乞^こ食^{じき}か立^{たち}ん坊^{ぼう}だよ。
教^{きょう}育^{いく}のある人^{ひと}にはないようだ」と答^{こた}えたら、主人^{しゅじん}は「そうかなあ、日^に本^{ほん}とは少^{すこ}し違^{ちが}うね」と
云^いった。

哲^{てつ}学^{がく}者^{しゃ}の意^い見^{けん}によつて落^{らく}雲^{うん}館^{かん}との喧^{けん}嘩^かを思^{おも}い留^{とま}った主人^{しゅじん}はその後^ご書^{しょ}齋^{さい}に立^たて籠^{こも}つてしきり
に何^{なに}か考^{かんが}えている。彼^かの忠^{ちゆう}告^{こく}を容^いれて静^{せい}坐^ざの裡^{うち}に靈^{れい}活^{かつ}なる精^{せい}神^{しん}を消^{しょう}極^{きよく}的に修^{しゅう}養^{よう}するつ
もりかも知^しれないが、元^{げん}来^{らい}が氣^きの小^{ちい}さな人^{にん}間^{げん}の癖^{くせ}に、ああ陰^{いん}氣^きな懷^ふ手^{ところ}ばかりしては碌^{ろく}
な結^{けつ}果^かの出^でようはずがない。それより英^{えい}書^{しょ}でも質^{しち}に入れて芸^{げい}者^{しゃ}から喇^ら叭^ぱ節^{せつ}でも習^{なら}った方^{ほう}が遙^{はる}
かにましだとまでは氣^きが付^ついたが、あんな偏^{へん}屈^{くつ}な男^{ねこ}はとうてい猫^{ねこ}の忠^{ちゆう}告^{こく}などを聴^きく氣^き遣^{づかい}はな
いから、まあ勝^かつ手にさせたらよかろうと五^ご六^{ろく}日は近^{ちか}寄りもせず暮^{くら}した。

今^{きょう}日はあれからちようど七^{なな}日^{にち}目^めである。禪^{ぜん}家^けなどでは一^{いち}七^{しち}日^{にち}を限^{かぎ}つて大^{たい}悟^ごして見^みせるなどと
凄^{すさま}じい勢^{いきおい}で結^{けつ}跣^{せん}する連^{れん}中^{じゆう}もある事^{こと}だから、うち的主^{しゅじん}人もどうかなつたろう、死^しぬか生^いき
るか何^{なん}とか片^{かた}付^づいたろうと、のそのそ椽^{えん}側^{がわ}から書^{しょ}齋^{さい}の入^{いり}口^{ぐち}まで来^きて室^{しつ}内^{ない}の動^{どう}静^{せい}を偵^{てい}察^{さつ}に及^{およ}
んだ。

書^{みなみむ}齋^{ろくじゆう}は南^{みなみ}向^{むかひ}きの六^む畳^{じやう}で、日^ひ当^{あた}りのいい所^{ところ}に大^{おほ}きな机^{つくえ}が据^すえてある。ただ大^{だい}きな机^きではわ
かるまい。長^{なが}さ六^{ろく}尺^{しゃく}、幅^{はば}三^{さん}尺^{しゃく}八^{はち}寸^{すん}高^{たか}さこれにかなうと云^いう大^{だい}きな机^きである。無^む論^{ろん}出^で来^き合^あの
ものではない。近^{きん}所^{じよ}の建^た具^ぐ屋^やに談^{だん}判^{ぱん}して寢^{しん}台^{たい}兼^{けん}机^きとして製^{せい}造^{ぞう}せしめたる稀^き代^{だい}の品^{しな}物^{もの}であ
る。何^{ゆえ}の故^{ゆゑ}にこんな大^{だい}きな机^きを新^{しん}調^{ちよう}して、また何^{うゑ}の故^{ゆゑ}にその上^{うゑ}に寢^ねて見^みようなどという
了^{りよう}見^{けん}を起^{おこ}したものか、本^{ほん}人^{にん}に聞^きいて見^みない事^{こと}だから頓^{とん}とわからない。ほんの一時^{いちじ}の出^で来^き心^{しん}
で、かか^{なんぶつ}る難^{かつ}物^{ぶつ}を担^こぎ込^こんだのかも知^しれず、あるいはことによると一^{いつ}種^{しゆ}の精^{せい}神^{しん}病^{びやう}者^{しゃ}におい
て吾^ご人^{じん}がしばしば見^み出^{いだ}すごとく、縁^{えん}もゆかりもない二^に個^{かん}の觀^{かん}念^{ねん}を連^{れん}想^{そう}して、机^きと寢^{ねん}台^{たい}を勝^かつ手^て
に結^{むす}び付^つけたものかも知^しれない。とにかく奇^き抜^{ばつ}な考^{かんが}えである。ただ奇^き抜^{ばつ}だけで役^{やく}に立^たたない
のが欠^け点^{てん}である。吾^{わが}輩^{はい}はかつて主^{しゅ}人^{にん}がこの机^きの上^{うゑ}へ昼^{ひる}寝^ねをして寢^ね返^{がえ}りをする拍^{ひやう}子^しに椽^{ちゆう}側^{がわ}へ転^{ころ}
げ落^おちたのを見^{けん}た事^じがある。それ以^い来^{らい}この机^きは決^{けつ}して寢^{ねん}台^{たい}に転^{てん}用^{よう}されないうである。

机^まの前^{まえ}には薄^{うす}っぺらなメ^めリ^りン^んス^すの座^ざ布^ふ団^{だん}があつて、煙^{たば}草^この火^ひで焼^やけた穴^{あな}が三^{みつ}つほどかたまつて
る。中^{なか}から見^{けん}える綿^{わた}は薄^{うす}黒^{くろ}い。この座^ざ布^ふ団^{だん}の上^{うゑ}に後^{うし}ろ向^むきにかしこま^まつてい^いるのが主^{しゅ}人^{にん}であ
る。鼠^{ねず}色^{いろ}によごれた兵^{へい}児^こ帯^{おび}をこま^{むす}結^{むす}びにむすんだ左^さ右^{ゆう}がだらりと足^{あし}の裏^{うら}へ垂^たれかか^かつてい

る。この帯へじゃれ付いて、いきなり頭を張られたのはこないだの事である。滅多に寄り付くべき帯ではない。

まだ考えているのか下手の考と云う喩もあるのにと後ろから覗き込んで見ると、机の上でいやにぴかぴかと光ったものがある。吾輩は思わず、続け様に二三度瞬をしたが、こいつは変だとまぶしいのを我慢してじっと光るものを見つめてやった。するとこの光りは机の上で動いている鏡から出るものだと云う事が分った。しかし主人は何のために書斎で鏡などを振り舞わしているのであろう。鏡と云えば風呂場にあるに極まっている。現に吾輩は今朝風呂場でこの鏡を見たのだ。この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。主人が毎朝顔を洗ったあとで髪を分けるときにもこの鏡を用いる。——主人のような男が髪を分けるのかと聞く人もあるかも知れぬが、実際彼は他の事に無精なるだけそれだけ頭を叮嚀にする。吾輩が当家に参ってから今に至るまで主人はいかなる炎熱の日といえども五分刈に刈り込んだ事はない。必ず二寸くらいの長さにして、それを御大そうに左の方で分けるのみか、右の端をちょっと跳ね返して澄している。これも精神病の徴候かも知れない。こんな気取った分け方はこの机と一向調和しないと思うが、あえて他人に害を及ぼすほどの事でないから、誰も何とも云わない。本人も得意である。分け方のハイカラなのはさておいて、なぜあんなに髪を長くするののかと思ったら実はこう云う訳である。彼のあばたは単に彼の顔を侵蝕せるのみならず、とくの昔しに脳天まで食い込んでいるのだそうだ。だからもし普通の人のように五分刈や三分刈にすると、短い毛の根本から何十となくあばたがあらわれてくる。いくら撫でも、さすってもぼつぼつがとれない。枯野に蛍を放ったようなもので風流かも知れないが、細君の御意に入らんのは勿論の事である。髪さえ長くしておけば露見しないですむところを、好んで自己の非を曝くにも当らぬ訳だ。なろう事なら顔まで毛を生やして、こっちのあばたも内済にしたいくらいなところだから、ただで生える毛を錢を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨の上まで天然痘にやられましたよと吹聴する必要はあるまい。——これが主人の髪を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわける原因で、その原因が鏡を見る訳で、その鏡が風呂場にある所以で、しこうしてその鏡が一つしかないという事実である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が書斎に来ている以上は鏡が離魂病に罹ったのかまたは主人が風呂場から持って来たに相違ない。持って来たとすれば何のために持って来たのだろうか。あるいは例の消極的修養に必要な道具かも知れない。昔し或る学者が何

とかい^{ちしき}う智識^とを訪^{おしより}うたら、和尚^ね両^{かわら}肌^まを抜^ぬいで、甌^かを磨^ましておられた。何をこしらえなさんと
質^{しつもん}問^{もん}をしたら、なにさ今^{いま}鏡^つを造^{つく}ろうと思^{おも}うて一生^{いっしょう}懸^{けん}命^{めい}にやっ^いておるところじゃと答^{こた}えた。
そこで学^{おど}者は驚^{めい}ろいて、なんぼ名^{めい}僧^{そう}でも甌^かを磨^まして鏡^かとする事^{こと}は出来^{でき}まいと云^いうたら、和尚^{わら}か
らからと笑^{わら}いながらそうか、それじゃやめよ、いくら書^{しよ}物^{もつ}を読^よんでも道^{みち}はわからぬのもそんな
ものじゃろと罵^のつたと云^のうから、主^き人もそんな事^かを聞^きき嚙^かって風^か呂^き場^かから鏡^かでも持^もって来^き
て、したり顔^{がお}に振^ふり廻^{まわ}しているの^だいぶつ^{そう}なの^かも知^しれない。大^{だい}分^ぶ物^{ぶつ}騒^{そう}にな^なって来^きた^なと、そ^うと窺^うっ^か
ている。

かくとも知らぬ主人^{ねっしん}ははなはだ熱^{よう}心^すなる容^い子^ちをも^つって一^い張^{ちやう}来^{らい}の鏡^かを見^みつめて^いる。元^{げん}来^{らい}鏡^かと
いうもの^は気^き味^みの悪^{わる}いものである。深^{しん}夜^や蠟^{ろう}燭^{そく}を立^たてて、広^{ひろ}い部^へ屋^やのなかで一^{ひとり}人^{にん}鏡^かを覗^{のぞ}き込^こ
むにはよほどの勇^{ゆう}気^きが^いる^そうだ。吾^わ輩^{はい}などは始^はめて当^{とう}家^けの令^{れい}嬢^{じやう}から鏡^かを顔^{かお}の前^{まえ}へ押^おし付^つけら
れた時^{とき}に、は^とと仰^{ぎやう}天^{てん}して屋^{やし}敷^きのまわ^りを三^{さん}度^ど馳^かけ回^{まわ}った^くら^いである。い^かに白^{はく}昼^{ちゆう}とい
えども、主人^{しゆじん}のよう^にかく一^い生^{しやう}懸^{けん}命^{めい}に見^みつめて^いる以上^こは自^じ分^{ぶん}の顔^{かお}が怖^{こわ}くなるに相^あ違^わ
ない。た^だ見^みてさ^えあ^まり気^き味^みのい^い顔^{かお}じゃ^ない。や^やあ^あつて主^{しゆじん}人^{にん}は「なるほど^{なるほど}きたない顔^{かお}だ」
と独^{ひとり}り言^{ごと}を云^いった。自^じ己^この醜^{しゆう}を自^じ白^{はく}するの^はな^なか^なか見^みあ^あげ^げた^たもの^だ。様^{よう}子^すから云^いうとた^し
か^に気^{きち}違^{がい}の所^{しよ}作^さだ^が言^いうこ^とは真^{しん}理^りである。こ^れがも^う一^い歩^ぽ進^{しん}むと、己^{おの}れ^の醜^{しゆう}悪^{あく}な事^{こと}が怖^{こわ}
なる。人^{にん}間^{げん}は吾^わ身^みが怖^{おそ}ろしい悪^{あく}党^{とう}である^と云^いう事^{こと}実^じを徹^{てつ}骨^{こつ}徹^{てつ}髓^{ずい}に感^{かん}じ^た者^{もの}で^ないと苦^く勞^{らう}人^{にん}
とは云^いえ^ない。苦^く勞^{らう}人^{にん}で^ないとどう^いて解^げ脱^{だつ}は出^い来^きない。主^{しゆじん}人もこ^こま^まで来^きたらつ^いでに「お
お怖^{おお}い」と^も云^いえ^ない^なもの^だである^がな^なか^なか云^いわ^ない。「なるほど^{なるほど}きたない顔^{かお}だ」と云^い
た^あと^で、何^{なに}を考^{かん}え出^だした^か、ふ^うと^と頬^ほっ^ぺた^たを膨^{ふく}ら^ました。そ^うし^てふ^くれ^た頬^ほっ^ぺた^た
を平^ひら^てで二^に三^{さん}度^ど叩^{たた}いて^見る。何^{なに}のま^まじ^ない^だか分^{わか}ら^ない。こ^の時^{とき}吾^わ輩^{はい}は^何だ^かこ^の顔^{かお}に似^にた^も
の^があ^るら^しいと云^いう感^{かん}じ^がした。よ^くよ^く考^{かん}え^て見^みるとそ^れは御^お三^{さん}の顔^{かお}である。つ^いで^だか
ら御^お三^{さん}の顔^{かお}をち^しよ^うと^と紹^{しやう}介^{かい}する^が、そ^れはそ^れはそ^れはふ^くれ^たもの^だである。こ^の間^{あい}さ^る人^{ひと}が
穴^{あな}守^{もり}稻^{いな}荷^にから河^か豚^{とん}の提^{てい}灯^{とう}を^みや^げに^持つ^て来^きて^くれ^たが、ち^{やう}ど^どあ^の河^か豚^{とん}提^{てい}灯^{とう}のよ^うに^ふ
く^れて^いる。あ^まり^ふく^れ方^{かた}が^{ざん}酷^{こく}な^{ので}眼^めは^両方^{りやう}共^{ごう}紛^{ふん}失^{しつ}して^いる。も^つと^も河^か豚^{とん}の^ふく
れる^のは^{まん}べ^んなく^{まん}丸^{まる}に^ふく^れる^のだ^が、お^三と^くると、元^こ来^{かく}の骨^{たか}格^{くせい}が^多角^た性^{せう}であ^つて、そ
の骨^ど格^お通^ありに^ふく^れ上^すが^るの^だか^ら、ま^るで^す水^{すい}気^きに^なや^んで^いる^ろっ^かく^どけ^いのよ^うな^{もの}だ。御^お
三^{さん}が^聞いた^らさ^ぞ怒^{おこ}る^だら^うか^ら、御^お三^{さん}は^この^くら^いに^して^また^主人^{にん}の^かへ^に帰^{かえ}る^が、か^くの^ご
と^くあ^らん^か限^{かぎ}り^の空^{くう}気^きを^もつ^て頬^かっ^ぺた^たを^ふく^らま^せた^ら彼^{かれ}は^{ぜん}前^{ぜん}申^{もう}す^と通^とり^て手^ての^ひら^で頬^ほっ^ぺ
を^叩き^なが^ら「こ^のく^らい^の皮^ひ膚^ふが^{きん}ちやう^{ちやう}と^めあ^ばた^も眼^めに^つか^ん」と^また^ど独^{ひとり}り^ご語^ごを^いつ^た。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「こうして見ると大変目立つ。やっぱりまともに日の向いてる方が平に見える。奇体な物だなあ」と大分感心した様子であった。それから右の手をうんと伸して、出来るだけ鏡を遠距離に持って行って静かに熟視している。「このくらい離れるとそんなでもない。やはり近過ぎるといかん。――顔ばかりじゃない何でもそんなものだ」と悟ったようなことを云う。次に鏡を急に横にした。そうして鼻の根を中心にして眼や額や眉を一度にこの中心に向ってくしゃくしゃとあつめた。見るからに不愉快な容貌が出来上がったと思ったら「いやこれは駄目だ」と当人も気がついたと見えて早々やめてしまった。「なぜこんなに毒々しい顔だろう」と少々不審の体で鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ引き寄せる。右の人指しゆびで小鼻を撫でて、撫でた指の頭を机の上にあった吸取り紙の上へ、うんと押しつける。吸い取られた鼻の膏が丸く紙の上へ浮き出した。いろいろな芸をやるものだ。それから主人は鼻の膏を塗抹した指頭を転じてぐいと右眼の下瞼を裏返して、俗に云うべっかんこうを見事にやって退けた。あばたを研究しているのか、鏡と睨め競をしているのかその辺は少々不明である。気の多い主人の事だから見ているうちにいろいろになると見える。それどころではない。もし善意をもって蒟蒻問答的に解釈してやれば主人は見性自覚の方便としてかように鏡を相手にいろいろな仕草を演じているのかも知れない。すべて人間の研究と云うものは自己を研究するのである。天地と云い山川と云い日月と云い星辰と云うも皆自己の異名に過ぎぬ。自己を措いて他に研究すべき事項は誰人にも見出し得ぬ訳だ。もし人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、飛び出す途端に自己はなくなってしまう。しかも自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない。いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出来ない相談である。それだから古来の豪傑はみんな自力で豪傑になった。人のお蔭で自己が分るくらいなら、自分の代理に牛肉を喰わして、堅いか柔いか判断の出来る訳だ。朝に法を聴き、夕に道を聴き、梧前灯下に書巻を手にするのは皆この自証を挑撥するの方便の具に過ぎぬ。人の説く法のうち、他の弁ずる道のうち、乃至は五車にあまる蠹紙堆裏に自己が存在する所以がない。あれば自己の幽霊である。もっともある場合において幽霊は無霊より優るかも知れない。影を追えば本体に逢着する時がないとも限らぬ。多くの影は大抵本体を離れぬものだ。この意味で主人が鏡をひねくっているなら大分話せる男だ。エピクテタスなどを鵜呑にして学者ぶるよりも遙かにましだと思う。

かがみ うぬぼれ じょうぞうき どうじ じまん しょうどくき ふ かきよえい ねん
鏡は己惚の醸造器であるごとく、同時に自慢の消毒器である。もし浮華虚栄の念をもって
これにたい とき はこれほど ぐぶつ せんどう どうぐ むかし ぞうじょうまん おのれ がい
対する時はこれほど愚物を煽動する道具はない。昔から増上慢をもって己を害し
た そのの じせき さんぶん に しょうさ ふつこくかくめい とうじものず おいしゃ
他を戕うた事蹟の三分の二はたしかに鏡の所作である。仏国革命の当時物好きな御医者さん
が改 良 首きり器械を 発 明して 飛んだ罪をつくったように、始めて鏡をこしらえた人も定め
ねざめ こと じぶん あいそ つ じが いしゆく おり み
し寢覚のわるい事だろう。しかし自分に愛想の尽きかけた時、自我の萎縮した折は鏡を見るほ
くすり けんしゅうりょうぜん かお そうろう そ こんにち
ど薬になる事はない。妍醜瞭然だ。こんな顔でよくまあ人で 候 と反りかえって今日ま
で暮らされたものだと気がつくにきまっている。そこへ気がついた時が人間の生涯中もつ
ともありがたい させつ きせつ ばか しょうち たつ
期節である。自分で自分の馬鹿を承知しているほど尊とく見える事はない。こ
の じかくせい まえ や あたま き おそ い
自覚性馬鹿の前にはあらゆるえらがり屋がことごとく 頭を下げて恐れ入らねばならぬ。
とうにん こうぜん われ けいぶちょうしょう
当人は昂然として吾を軽侮嘲笑しているつもりでも、こちらから見るとその昂然たるところ
ろが恐れ入って頭を下げている事になる。主人は鏡を見て己れの愚を悟るほどの賢者ではあ
るまい。しかし吾が顔に印せられる痘痕の銘くらいは公平に読み得る男である。顔の醜い
のを じにん こころ いや えとく かにてい てつがくしゃ
自認するのは心の賤しきを会得する楷梯にもなろう。たのもしい男だ。これも哲学者か
らやり込められた結果かも知れぬ。

かやうに かんが ようす し しゅじん おも ぞんぶん
かように考 えながらなお様子をうかがっていると、それとも知らぬ主人は思う存分あかんべ
えをしたあとで「大分充 血しているようだ。やっぱり慢性結膜炎だ」と言いながら、人さ
し 指の横つらでぐいぐい充血した 暇 をこすり始めた。大方痒いのだろうけれども、たださえ
あか しか ころ こと おおかたかゆ
あんなに赤くなっているものを、こう擦ってはたまるまい。遠からぬうちに塩鯛の眼玉のご
とく 腐爛するにきまつてる。やがて眼を開いて 鏡 に向ったところを見ると、果せるかなどん
よりとして北国の冬空のように曇っていた。もっとも平常からあまり晴れ晴れしい眼ではな
い。誇大な形容詞を用いると混沌として黒眼と白眼が剖判しないくらい漠然としている。彼
の せいしん もうろう ふとくようりょうてい いっかん あいあいぜんまいまいぜん
精神が朦朧として不得要領底に一貫しているごとく、彼の眼も曖々然味々然として
とこし がんか おく ただよ たいどく い ほうそう よは
長 えに眼窩の奥に漂 うている。これは胎毒のためだとも云うし、あるいは疱疹の余波だと
も かいしゃく ちい じぶん やなぎ むし あかがえる やっかい こと
解釈されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介になった事もあるそうだが、せ
つ つかく 母親の丹精も、あるにその甲斐あらばこそ、今日まで生れた当時のままでぼんやりし
ている。吾輩ひそかに思うにこの 状態は決して胎毒や疱疹のためではない。彼の眼玉がかよ
うに かいじゅうこんだく ひきょう ほうこう なお ずのう ふとうふめい じっしつ
晦 渋濁の悲境に彷徨しているのは、とりも直さず彼の頭脳が不透不明の実質から
構成されていて、その作用が暗憺溟濛の極に達しているから、自然とこれが形体の上にあ
らわれて、知らぬ母親にいらぬ心配を掛けたんだろう。煙たって火あるを知り、まなこ濁って

愚なるを証す。して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保銭のごとく穴があいているから、彼の眼もまた天保銭と同じく、大きな割合に通用しないに違いない。

今度は髯をねじり始めた。元来から行儀のよくない髯でみんな思い思いの姿勢をとって生えている。いくら個人主義が流行る世の中だって、こう町々に我儘を尽くされては持主の迷惑はさこそと思いやられる、主人もここに鑑みるところあって近頃は大きに訓練を与えて、出来る限り系統的に按排するように尽力している。その熱心の功果は空しからずして昨今ようやく歩調が少しととのうようになって来た。今までは髯が生えておったのであるが、この頃は髯を生やしているのだと自慢するくらいになった。熱心は成效の度に応じて鼓舞せられるものであるから、吾が髯の前途有望なりと見てとって主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず髯に向って鞭撻を加える。彼のアムビションは独逸皇帝陛下のように、向上の念の熾な髯を蓄えるにある。それだから毛孔が横向であろうとも、下向であろうとも聊か頓着なく十把一とからげに握っては、上の方へ引っ張り上げる。髯もさぞかし難儀であろう、所有主たる主人すら時々には痛い事もある。がそこが訓練である。否でも応でもさかに扱き上げる。門外漢から見ると気の知れない道楽のようであるが、当局者だけは至当の事と心得ている。教育者がいたずらに生徒の本性を撓めて、僕の手柄を見給えと誇るようなもので、毫も非難すべき理由はない。

主人が満腔の熱誠をもって髯を訓練していると、台所から多角性の御三が郵便が参りましたと、例のごとく赤い手をぬつと書斎の中へ出した。右手に髯をつかみ、左手に鏡を持った主人は、そのまま入口の方を振りかえる。八の字の尾に逆か立ちを命じたような髯を見るや否や御多角はいきなり台所へ引き戻して、ハハハハと御釜の蓋へ身をもたして笑った。主人は平気なものである。悠々と鏡をおろして郵便を取り上げた。第一信は活版ずりで何だかいじめしい文字が並べてある。読んで見ると

拝啓 愈御多祥奉賀 候回顧すれば日露の戦役は連戦連勝の勢に乗じて平和
克復を告げ吾忠勇義烈なる将士は今や過半万歳声裡に凱歌を奏し国民の歓喜何ものか
之に若かん曩に宣戦の大詔煥発せらるるや義勇公に奉じたる将士は久しく万里の異境に
在りて克く寒暑の苦難を忍び一意戦闘に従事し命を国家に捧げたるの至誠は永く銘して
忘るべからざる所なり而して軍隊の凱旋は本月を以て殆んど終了を告げんとす依

ほんかい きた にじゅうごにち きほんくなくいっせんゆうよ しゅつせいしょうこうか しそつ たいほんくみんいっばん
って本会は来る二十五日を期し本区内一千有余の出 征 将 校 下 士 卒 対 し 本 区 民 一 般 を
だいひょう もつ いちだい しゅくがかい かいさい かね ぐんじんいぞく いしゃ た じゅくせい むか
代 表 し 以 て 一 大 凱 旋 祝 賀 会 を 開 催 し 兼 て 軍 人 遺 族 を 慰 藉 せ ん が 為 め 熱 誠 之 を 迎 え
いささかかんしゃ びちゅう ひょう たくつゐ かくい ごきょうひ あお このせいてん きょこう さいわい え
聊 感 謝 の 微 衷 を 表 し 度 就 て は 各 位 の 御 協 賛 を 仰 ぎ 此 盛 典 を 挙 行 す る の 幸 を 得 ば 本
めんもくこれにすぎず ぞんじそろあいだなにとぞごさんせいふる ぎえん ひたすらきぼう し た そろ
会 の 面 目 不 過 之 と 存 候 間 何 卒 御 賛 成 奮 っ て 義 捐 あ ら ん こ と を 只 管 希 望 の 至 に 堪 え ず 候
けいぐ
敬 具

とあつて差し出し人は華族様である。主人は黙読一過の後直ちに封の中へ巻き納めて知らん
かお 顔を している。義捐などは恐らくしそうにない。せんだつて東北凶作の義捐金を二円とか
さんえん だ あ ひとごと とうほくきょうさく ぎえんきん にえん
三 円 と か 出 して 从 人 毎 に 義 捐 を と ら れ た 、 と ら れ た と 吹 聴 して いる くら い で 是 である。
いじょう さ だ きま だろぼう
義 捐 と 有 る 以 上 は 差 し 出 す も の で 、 と ら れ る も の で ない に は 極 っ て いる 。 泥 棒 に あ っ た の で
ふおんとう かん とうなん かなか
は 有 る ま い し 、 と ら れ た と は 不 穩 当 で 是 である。しかるにも 関 せ ず 、 盗 難 に だ も 罹 っ た か の ご と く
おも かに 軍 隊 の 歓 迎 だ と 云 っ て 、 い かに 華 族 様 の 勧 誘 だ と 云 っ て 、
ごうだん も し かつぱん てがみ きんせん にんげん おも
強 談 で 持 ち か け た ら い ざ 知 ら ず 、 活 版 の 手 紙 くら い で 金 銭 を 出 す よ う な 人 間 と は 思 わ れ な
まえ じぶん あと
い 。 主 人 か ら 云 え ば 軍 隊 を 歓 迎 す る 前 に ま ず 自 分 を 歓 迎 し た い の で 是 である。自 分 を 歓 迎 し た 後 な
たいてい ちようせき さ つか あいだ まか
ら 大 抵 の も の は 歓 迎 し そ う で 是 であるが、自 分 が 朝 夕 に 差 し 支 え る 間 は 、 歓 迎 は 華 族 様 に 任 せ
りょうけん だいにしん と あ
て お け 了 見 ら し い 。 主 人 は 第 二 信 を 取 り 上 げ た が 「 や 、 こ れ も 活 版 だ 」 と 云 っ た 。

じかしゅうれい こう そろところ きかますますごりゅうせい だんがしあげたてまつりそろのぶほんこうぎ ごしょうち とお
時 下 秋 冷 の 候 に 候 処 貴 家 益 々 御 隆 盛 の 段 奉 賀 上 候 陳 れ ば 本 校 儀 も 御 承 知 の 通 り
いささくさくねんいらいにさんやしんか た さまた いちじそのきよく たつ そうらえども こ みなふしょうしんさく
一 昨 々 年 以 来 二 三 野 心 家 の 為 め に 妨 げ ら れ 一 時 其 極 に 達 し 候 得 共 是 れ 皆 不 肖 針 作 が
た ところ きいん ぞん ふか みずか いまし がしんしょうたんそ くしん けつかようや ここ
足 ら ざ る 所 に 起 因 す と 存 じ 深 く 自 ら 警 む る 所 有 り 臥 薪 嘗 胆 其 の 苦 辛 の 結 果 漸 く 茲 に
どくりょくもつ わ りそう てき こうしゃしんちくひ う みち こう そろそ べつぎ ごぎ
独 力 以 て 我 が 理 想 に 適 す る だ け の 校 舎 新 築 費 を 得 る の 途 を 講 じ 候 其 は 別 義 に も 御 座 なく
べっさつほうせいひじゅつこうよう めいめい しょさつしゅつばん ぎ ござそろほんしよ たねんくしんけんきゅう
別 冊 裁 縫 秘 術 綱 要 と 命 名 せ る 書 冊 出 版 の 義 に 御 座 候 本 書 は 不 肖 針 作 が 多 年 苦 心 研 究
こうげいじょう げんりげんそく のつ しん にく さ ち しぼ おもい な ちよじゅつ
せ る 工 芸 上 の 原 理 原 則 に 法 と り 真 に 肉 を 裂 き 血 を 絞 る の 思 を 為 して 著 述 せ る も の に 御
よ あまね いっばん かてい せいほんじゅつび さしやう りじゅん ふ ごこうきゅう ねが いちめん
座 候 因 っ て 本 書 を 普 く 一 般 の 家 庭 へ 製 本 実 費 に 些 少 の 利 潤 を 附 して 御 購 求 を 願 い 一 面
しどうはったつ いちじよ どうじ またいめん きんしょう ちくせき けんちくひ あ
斯 道 發 達 の 一 助 と な す と 同 時 に 又 一 面 に は 僅 少 の 利 潤 を 蓄 積 して 校 舎 建 築 費 に 当 つ る
つもり よ ちかごろなんともきょうしゅく いた ぞん そろ ちゅう ごきふ
心 算 に 御 座 候 依 っ て は 近 頃 何 共 恐 縮 の 至 り に 存 じ 候 え だ も 本 校 建 築 費 中 へ 御 寄 附
なしくださる おぼしめ ていきょうつかまつりそろ いちぶ ごじじよ かた
被 成 下 と 御 思 召 し 茲 に 呈 供 仕 候 秘 術 綱 要 一 部 を 御 購 求 の 上 御 侍 女 の 方 へ な り と も
ごぶんよなしくだされそろ ごさんどう い ごひょうしょうなしくだされたくふ こんがんつかまつりそろそうそうけいぐ
御 分 与 被 成 下 候 て 御 賛 同 の 意 を 御 表 章 被 成 下 度 伏 して 懇 願 仕 候 匆 々 敬 具

だいにっばんじよし さいこうとうだいがくいん
大 日 本 女 子 裁 縫 最 高 等 大 学 院

こうちょう ぬいだしんさくきゅうはい
校長 縫田針作九 拝

とある。主人はこの鄭重なる書面を、冷淡に丸めてぽんと屑籠の中へ抛り込んだ。せつかくの針作君の九拜も臥薪嘗胆も何の役にも立たなかつたのは気の毒である。第三信にかか
る。第三信はすこぶる風変りの光彩を放っている。状袋が紅白のだんだらで、餛飩棒の
看板のごとくはなやかなる真中に珍野苦沙弥先生虎皮下と八分体で肉太に認めてある。中
からお太さんが出るかどうか受け合わないが表だけはすこぶる立派なものだ。

もし我を以て天地を律すれば一口にして西江の水を吸いつくすべく、もし天地を以て我を
律すれば我は則ち陌上の塵のみ。すべからく道え、天地と我と什麼の交渉かある。……
始めて海鼠を食い出せる人は其胆力に於て敬すべく、始めて河豚を喫せる漢は其勇氣
に於て重んずべし。海鼠を食べるものは親鸞の再来にして、河豚を喫せるものは日蓮の
分身なり。苦沙弥先生の如きに至っては只干瓢の酢味噌を知るのみ。干瓢の酢味噌を食っ
て天下の士たるものは、われ未だ之を見ず。……

親友も汝を売るべし。父母も汝に私あるべし。愛人も汝を棄つべし。富貴は固より頼
みがたかるべし。爵禄は一朝にして失うべし。汝の頭中に秘蔵する学問には黴が生
えるべし。汝何を恃まんとするか。天地の裡に何をたのまんとするか。神？ 神は人間の
苦しまぎれに捏造せる土偶のみ。人間のせつな糞の凝結せる臭骸のみ。恃むまじきを恃
んで安しと云う。咄々、酔漢漫りに胡乱の言辞を弄して、蹣跚として墓に向う。油尽き
て灯自ら滅す。業尽きて何物をか遺す。苦沙弥先生よろしく御茶でも上がれ。……

人を人と思わざれば畏るる所なし。人を人と思わざるものが、吾を吾と思わざる世を憤
るは如何。権貴栄達の士は人を人と思わざるに於て得たるが如し。只他の吾を吾と思わぬ時
に於て佛然として色を作す。任意に色を作し来れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思うとき、他の吾を吾と思わぬ時、不平家は発作的に天降る。此発作的活動
を名づけて革命という。革命は不平家の所為にあらず。権貴栄達の士が好んで産する所な
り。朝鮮に人参多し先生何が故に服せざる。

ざいすがも てんどうこうへい
在巢鴨 天道公平

さいはい
再拝

しんさくくん きゅうはい おとこ たん さいはい きふきん いらい
針作君は九 拝 であつたが、この 男 は単に再拝だけである。寄附金の依頼でないだけに
しちはい おうふう かま
七 拝 ほど横風に構えている。寄附金の依頼ではないがその代りすこぶる わか
どこの雑誌へ出して も 没書 になる 価値 は 充 分 あるのだから、頭脳の不透明をもって鳴る主人
ざっし だ ぼっしょ かし じゅうぶん ずのう ふとうめい な しゅじん
は 必 ず寸断寸断に引き裂いてしまうだろうと 思 のほか、打ち返し打ち返し読み直してい
かなら ず た ず た ひ さ おもい う かえ う かえ よ なお
る。こんな手紙に意味があると 考 えて、あくまでその意味を究めようという決心かも知れな
てがみ い み かんが きわ けっしん し
い。およそ天地の間にわからんものは沢 山 あるが意味をつけてつかないものは一つもない。ど
てんち かん たくさん ひと
んなむずかしい 文 章 だも 解 釈 しよう とすれば容易に解釈の出来るものだ。人間は馬鹿であ
ぶんしょう かいしゃく ようい で き にんげん ば か
ると云おうが、人間は利口であると云おうが手もなくわかる 事 だ。それどころではない。人間
い りこう て こと
は犬であると云つても豚であると云つても別に苦しむほどの命題ではない。山は低いと云つ
いぬ ぶた べつ くる めいだい やま ひく
ても構わん、宇宙は狭いと云つても差し支えはない。鳥 が白くて小町が醜婦で苦沙弥先生
かま うちゅう せま さ つか からす しろ こまち しゅうふ くしゃみせんせい
が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙でも何とか蚊とか理窟さえつければど
くんし とお こと む い み なん か りくつ
うとも意味はとれる。ことに主人のように知らぬ英語を無理矢理にこじ付けて説明し通して来
し えいご むりやり こ せつめい とお き
た男はなおさら意味をつけたがるのである。天気 悪 のい のになぜグード・モーニングですか
てんき わ
と生徒に問われて七日間考えたり、コロンバスと云う名は日本語で何と云いますかと聞かれて
せいと と なぬかかん な にほんご き
三日三晩かかって 答 を工夫するくらいな男には、干 瓢 の酢味噌のが天下の士であろうと、
みっかみばん こたえ くふう かんびょう すみそ てんか し
朝鮮の仁参を食って革命を起そうと随意的意味は随処に湧き出る訳である。主人はしばらく
ちょうせん にんじん く かくめい おこ ずい い ずいしょ わ で わけ
くしてグード・モーニング 流 にこの難解な言句を呑み込んだと見えて「なかなか意味深長
りゅう なんかい ごんく の こ み い み しんちょう
だ。何でもよほど哲理を研 究 した人に 違 ない。天晴な見識だ」と大変賞賛した。
てつり けんきゅう ひと ちがい あつぱれ けんしき たいへんしょうさん

いちごん しゅじん ぐ わか ひるがえ かんが み
この一言でも主人の愚なところはよく分るが、 翻 っ て 考 えて見るといささかもっともな
てん なに よ くせ いう
点もある。主人は何に寄らずわからぬものをありがたがる癖を有している。これはあながち主
かぎ こと ば か で き せんぶく ほか
人に限った事でもなからう。分らぬところには馬鹿に出来ないものが潜伏して、測るべから
へん なん けだか こころもち おこ ぞくじん
ざる辺には何だか気高い心 持 が起るものだ。それだから俗人はわからぬ事をわかったように
ふいちょう かかわ がくしゃ こうしゃく だいがく こうぎ
吹聴するにも係らず、学者はわかった事をわからぬように講 釈 する。大学の講義でもわ
しゃべ ひと ひょうばん せつめい もの じんぼう し
からん事を喋舌る人は評判がよくってわかる事を説明する者は人望がないのでもよく知れ
てがみ けいふく い ぎ めいりょう
る。主人がこの手紙に敬服したのも意義が明瞭であるからではない。その主旨が那邊に存す
しゅし なへん せん
るかほとんど捕え難いからである。急 に海鼠が出て来たり、せつな糞が出てくるからであ
とら がた きゅう なまこ で き ぐそ
る。だから主人がこの 文 章 を尊敬する唯一の理由は、道家で道 徳 経 を尊敬し、儒家で
ぶんしょう せんけい ゆいいつ りゅう どうげ どうとくきょう じゅか

えききょう ぜんけ りんぎいろく いっぱん まった ただ ぜんぜん
易経を尊敬し、禅家で臨濟録を尊敬すると一般で全く分らんからである。但し全然分ら
んでは気がすまんから勝手な註釈をつけてわかった顔だけはする。わからんものをわかった
つもりで尊敬するのは昔から愉快なものである。——主人は恭しく八分体の名筆を巻き
おさ 納めて、これを机上に置いたまま懐手をして冥想に沈んでいる。

たの たの げんかん おお こえ あんない こ めいてい
ところへ「頼む頼む」と玄関から大きな声で案内を乞う者がある。声は迷亭のようだが、迷
亭にあ似合わずしきりに案内を頼んでいる。主人は先から書齋のうちでその声を聞いているのだ
が懐手のまま毫も動こうとしない。取次に出るのは主人の役目でないという主義か、この主人
は決して書齋から挨拶をした事がない。下女は先刻洗濯石鹸を買いに出た。細君は憚りで
ある。すると取次に出べきものは吾輩だけになる。吾輩だって出るのはいやだ。すると客人
は沓脱から敷台へ飛び上がって障子を開け放ってつかつか上り込んで来た。主人も主人だが
きゃく 客も客だ。座敷の方へ行っただと思おうと襖を二三度あけたり閉てたりして、今度は書齋の
方へやってくる。